

## 1.実習内容

午前	午後
朝礼参加、病児保育かいつぶりの施設案内、認定 NPO 法人うりずんの施設案内および実習	うりずんでの実習、訪問診療の同行、高橋先生との総括

## 2.考察

この 1 日で学んだことをすべて書き起こすことは難しいので特に印象に残ったことを述べていく。午前中に認定特定非営利活動法人「うりずん」(以下うりずん)の施設案内と午後の訪問診療までの間、利用者の子供たちとレクリエーションで遊んだり、スタッフの方々とお話しをさせて頂いた。うりずんは一日中医療的介護的なサポートを必要とする重症心身障害をもつ患者さんを日中預かり、3A(安全・安心・安楽)をモットーに子供と家族にひと時の休息と安心を提供する事を目的として発足された。6 年間の学生生活で様々な高齢者向けの介護施設での実習を経験し、レスパイト目的の施設も多いことを踏まえ、初め私が抱いたイメージは毎日 24 時間の子供の介護を強いられるご両親のサポートの側面が大きいと考えていた。しかし、うりずんの毎年恒例行事の一つの zoo についてのお話で一緒に参加した患者さんの兄弟(おそらく弟)が「僕も初めて動物に触ったよ！」と喜ぶ声があり、また別のご両親から「初めて兄弟の学校行事に参加することができました」という声もあり、どうしても満足に時間をかけてもらえない患者さんの兄弟の存在に気付かされた。ただ家族にひと時の休息を提供するだけでなく、本当はもっと両親に甘えたい、自由に遊びたいと少なからずは抱く兄弟の思いにもうりずんの活動は寄与しているのだと確認する事ができた。

利用者の子供たちは元気いっぱい常に活気あふれる声が聞こえる。うりずんは重症心身障害を抱える子供たちが多いためスタッフさんがマンツーマンでの支援を行っており、それゆえに一日に受け入れ可能な人数に制限があるし、人件費もかかる。日中受け入れだけでなく、いずれは宿泊での受け入れも可能にしたいとスタッフの方がおっしゃっていたが、やはりそのためには施設運営のためのお金と人材が必要であり、実際うりずんは全国の賛同者からの寄付金にならざるに依存している現状で、高齢社会への対策にばかり目が行きがちの現代において、24 時間医療介護の支えなしでは命をつなぐことが難しい子供の命を支える事業に国民の関心と財源をあてることも必要である。

午後に高橋先生の 3 件の訪問診療に同行させて頂いた。先生が来るとどの家庭の方も笑顔で迎え入れて下さり、医師と患者以前の間人同士の深い信頼関係が伺われた。医師国家試験に向けて半年は机に向かって勉強を積んできて臨床の現場から少し遠のいていた自分にとって改めて目指すべき地域の医師像を高橋先生の姿から確認できたと感じる。3 件目のた

ける君宅の訪問診療は今後忘れることのない経験になったと感じる。高橋先生がうりずんを立ち上げるきっかけになったたける君は本日特別支援学校を卒業され、私たちも一緒に被り物をしささやかなお祝いをさせて頂いた。なかなか文に書き起こすことは難しいが、たける君のお宅で感じた胸が詰まる思いとこれから医師として働く覚悟は忘れがたいものになった。医学生として6年間「寄り添う」という事は耳にタコができるほど聞いてきたし、意識しているつもりだったが、その現実がこんなにも深く、重いものなのかを思い知らされた。患者さんと家族に寄り添うとはどういう意味なのかを学生最後の実習で学ぶことができたのはとても貴重なことだった。

最後に訪問診療から帰宅後に高橋先生と総括をして頂いた。「小児在宅診療、という言葉が特別なものじゃなく当たり前言葉になればいいね」目の前の困っている患者さんと家族を支えようとしているだけで特別なことはしていないと言う高橋先生が最後にこの言葉をおっしゃっていた。医療の高度化により以前は救えなかった命が救えるようになった一方、重度の障害を抱えたまま生きていく子供たちが増加しており、確かにそのような患者さんの診療に当たることは専門の小児科医以外もしていかなければならないし、ましてや地域医療の一翼を担う自治医科大学の卒業生として私たちの使命でもあると感じる。一日高橋先生に同行して実習させて頂き、病に困っている人を助けるという医師としての第一の使命も再確認する事でき、4月からの研修医として働く上でのモチベーションに繋がった。

### 3.謝辞

今回お忙しい中実習を受け入れて下さった高橋昭彦先生をはじめ、ひばりクリニック・認定NPO法人うりずん・病児保育かいつぶりのスタッフの皆様、準備やサポートをして下さった関係者の皆様、そして学びの場を提供して下さいました患者および患者家族の皆様、充実した研修をさせて頂きました、本当にありがとうございました。